

みんななかまの活用
「ぼくも遊びたい」(第33集)

ねらい

○相手の思いや願いを知り、自分の思いを伝えることの大切さに気づく。

対 象

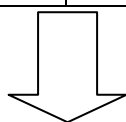
○二年保育年少児・年長児

展開例

ペープサートを使って

教師の発問	幼児の言葉
<p>○ミケちゃんとチョコちゃんとシロちゃんが、つぶれてしまった砂山をじっと見つめていた場面 「みんなだったらどうする。」</p> <p>「どんな気持ちだったかな。」</p> <p>「みんながトラくんだったらどうするかな。」</p> <p>「トラくんは、お山を崩すつもりだったのかな。」</p>	<p>「もう1回作る。」 「『こわさんといて』って言う。」</p> <p>「せっかく作ったのに、つぶれて悲しい。」</p> <p>「『つぶしてごめん』って言う。」</p> <p>「力を入れすぎたから、崩れた。」 「崩すつもりじゃなかった。」</p>
<p>○トラくんは、いきなりスクーターを取り上げるとしっぽをふりふり、走り出していった場面 「みんなだったらどんな気持ちになるかな。」</p> <p>「そんなときどうするの。」</p>	<p>「怒る。」 「順番守らないとだめ。」 「いやな気持ち。」</p> <p>「『返して。』って言う。」 「追いかける。」 「『やめて』って言う。」</p>
<p>○「わあん。」「わあん。」トラくんは、とうとう泣き出してしまった場面</p>	

<p>「どうしてトラくんは泣き出してしまったのかな。」</p> <p>「どうしたらトラくんは、みんなと遊べるようになるのかな。」</p> <p>「そうね。約束守って遊んだら仲良く遊べるね。トラくんも友だちと仲良く遊べるようになったらいいね。」</p> <p>○「友だちやよなあ」の場面で「トラくんはみんなに『ごめん』って言えたね。」</p>	<p>「ひとりぼっちで寂しかったから。」</p> <p>「みんなと遊びたいから。」</p> <p>「山を壊したり、スクーターを取ったりしたからなかまに入れてもらえなかった。」</p> <p>「『遊ぼう。』って言えばいい。」</p> <p>「順番守ったらいい。」</p> <p>「みんなトラくんのことを心配してるな。」</p> <p>「トラくんえらいね。」</p> <p>「『トラくんやさしいし、力持ちや』ってほめてもらって嬉しい気持ちになったね。」</p>
--	--



自分たちの生活の中でのことを話し合う

教師の発問	幼児の言葉
「みんなも幼稚園で遊んでいるときに困ったことは、ないかな。」	「砂場でせっかく作った山をつぶされたことある。」 「スクーター貸してくれなかった。」
「そんな時どうしたの。」	「壊さんといってって言った。」 「泣いた。」 「我慢した。」
「でも、乗りたかったらどう言ったらいいのかな。」	「『貸して』って言う」 「『順番守らないとだめ』『ぼくが先に使ってたから待てて』って言ったらいい。」
「友だちと遊んでいて悲しい気持ちになったことはあるかな。」	「入れてって言ったのに、ダメって言われた。」 「けんかしたとき。」 「大きい組さんにチビって言われた。」

<p>「そんな時どうしたの」</p> <p>「どうしたらいいかな。」</p> <p>「嬉しい気持ちになったのはどんなときかな。」</p> <p>「困ったことや悲しいこと、うれしいことがいっぱいあるね。自分がいやだと思ふことやしてほしいことを友だちにお話しようね。そしたら友だちもわかってくれるよ。」</p>	<p>「先生に言った。」</p> <p>「一人で遊んだ。」</p> <p>「違う子と遊んだ。」</p> <p>「『なんで入れてくれないの。』って言えばいい。」</p> <p>「『ごめんね。』って言えばいい。」</p> <p>「『一緒にしよう。』と誘ってもらったとき」</p> <p>「けんかして『ごめんね』って言ってまた一緒に遊べたとき嬉しかった。」</p> <p>「ころんだとき、『だいじょうぶ』って言ってくれた。」</p> <p>「仲良く遊んだら楽しいもんね。」</p>
---	---

教材

- 「みんななかま」第33集
- ペープサート

ぼくも遊びたい

ここは、猫の国のニヤンニヤン幼稚園です。

砂場で元気いっぱいの子どもたちが、遊んでいます。

「ミケちゃん、チョコちゃん、もっと高い山にしようか。」

「うん、いいよ。シロちゃん。」

みんなは、うれしそう。顔を見合いながら、どんどん砂を盛り上げて高い山にしていきます。スコップを使って、砂山が崩れないように、たたいて固めていきます。

「ぼく、水を運んでくるよ。まっててね。」

「ありがとう。」

「シロちゃんが、帰ってくるまでにもっともっと高くしようよ。」

「そうだね。頑張ろう。」

そこへ、トラくんが、勢いよく走ってきました。

「ぼくもするよ。スコップ貸して。」

「うん、いいよ。」

「今、ぼくたち、高い山にしている

ところなんだ。」

「手伝ってよ。トラくん。」

「そおっと、やってね。崩れちゃうからね。そおっとだよ。」

「よおし。ぼくに任せて。」

トラくんは、力いっぱい砂山にスコップを突っ込んでしまいました。みんなで作った砂山が、あっと言う間に崩れてしまいました。

「トラくん、だからそおっとしないと崩れるって言ったのに。だめだよ。」

「ほんとだよ。何でそんなことするのよ。」

「せっかく高くしようと思っていたのに。」

「ふんだ。ぼくのせいじゃないもん。高い山にしようと思ったんだけど、勝手につぶれたんだよ。」

トラくんは、知らんぷりをして行ってしまいました。

ミケちゃんとチョコちゃんとシロちゃんは、つぶれてしまった砂山をじっと見つめています。

広い園庭では、プチくんとクロちゃんとマロくんたちが、スクーターで遊んでいます。

「よし。いくぞ。」

「よおい。ドン。」

足で地面をけり、体を丸めて斜めに倒しながらカーブを回って競争です。プチくんもクロちゃんもマロくんも必死に走ります。それを見ているニヤンニヤン幼稚園の友達も応援しています。楽しそうに遊んでいる様子を見て、トラくんが、駆け寄ってきました。

「ぼくもする。スクーター貸して。ぼく、速いよ。」

「だめだよ。ちゃんと並んでないと。」

「そうだよ。順番守ってよ。」

「だって、ぼく、走りたいんだもん。」



トラくんは、いきなりスクーターを取り上げると、しっぽをふりふり、ハンドルの向きを変え、走り出して行ってしまいました。

「もう、トラくんたら。いつも自分勝手なんだから。」

スクーターで遊んでいた友達も、みんなぷんぷん怒っています。

「ああ、面白かった。今度はなにをして遊ぼうかなあ。」

「そうだ、木登りして遊ぼう。」

トラくんは、幼稚園の大きな木に登り始めました。枝に足をかけ、どんどん登っていきます。枝と枝の間から下をのぞくと、ミケちゃんとチョコちゃんとシロちゃんが砂場で遊んでいるのが見えます。

「ヤッホー。シロちゃん。登っておいでよ。楽しいよ。」

返事がありません。いくら呼んでもシロちゃんから、声がかえってきません。

「何だよ。聞こえてないのかなあ。」

と、ちょっとつまんなくなりました。トラくんは、スクーターで遊んでいるプチくんに向かって、

「おおいプチくん。こっちへおいでよ。木登りおもしろいよ。」

「あれトラくんじゃないか。とっても高いところに登ったねえ。」

「うん。気持ちいいよ。山も見えるし、小鳥さんが飛んでいるのも見えるし、風も涼しいよ。ぼくと一緒に木登りしようよ。」

「うん。でもぼく、クロちゃんとマロくと遊んでるから・・・。」

「何だよ。いいよ。ぼくひとりで遊ぶもん。」

「ねえチョコちゃん。ぼくと木登りしようよ。」

と、大きな声で呼びました。返事がありません。友達と楽しく遊んでいるチョコちゃんには、聞こえなかったようです。

「何だつまんないの。」

「いいもんいいもん、ぼくひとりで遊ぶもん。」

トラくんは、木の上へ上へと登っていきました。風が通り抜けていきます。枝の間から下を見ても、誰も見えません。チョコちゃんもプチくんもシロちゃんもみんな見えません。「みんな、どこへいったんだろう。」

トラくんは、だんだんつまらなくなってきました。そして、何だかとっても、寂しくなってきました。

「わあん。わあん。」

トラくんは、とうとう泣き出してしまいました。

「あれ、誰か泣いているよ。」

「えっ、本当だ。」

「どこだろう。」

「あの声は、トラくんだよ。」

ミケちゃん、チョコちゃん、プチくんみんなが、トラくんの泣き声に気づいて、木の下に集まってきました。

「トラくん、どうしたの。そんな所で泣いてないで、降りておいでよ。」

「トラくん、トラくん。」



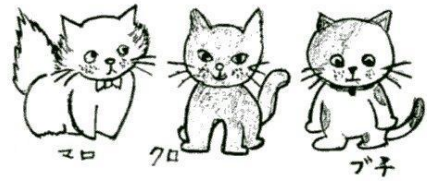
「大丈夫。」

トラくんは、みんなの声に気がつきました。

「ぼく、ここだよ。」

「トラくん、降りておいでよ。どうしたの。」

トラくんは、鼻水と涙をふき、木からゆっくりと降りてきました。みんなは、心配そうにトラくんの顔を見えています。



「ぼく、だれも遊んでくれなくて、ひとりぼっちになっちゃって、とっても寂しかったんだ。」

トラくんは、みんなの顔を見ながら、寂しくなって泣いたことを話しました。

「大丈夫だよ、トラくん。ぼくたち、ずっとここで遊んでいたよ。」

「トラくん。私たちどこにも行ってないよ。」

「そうだよ。ぼくたち、友達だよ。」

「うん。ぼくね、みんなととっても遊びたかったんだよ。」

「トラくん、いつも自分勝手に遊ぶからなあ。」

「そうだね、順番守らないし、偉そうに言うしなあ。」

「ご・め・ん・な。」

「でも、力持ちだよねえ。重い水運んでくれたよ。強いよね。」

「楽しい遊び、いっぱい知ってるしね。」

トラくんは、みんなが口々に言うことを聞いて、寂しかった気持ちが、どこかへいってしまいました。

「えへへ。」

「友達だよなあ。」

「うん。」

「よし、じゃあ、みんなを、砂場で遊ぶことにしよう。ミケちゃんシロちゃん、チョコちゃんは、高い山作って。マロくん、クロちゃんは、川を作って。ぼくとプチくんは、水をくんでくるから……………」

いつものトラくんの声。

「もう、トラくんたら。自分勝手なんだから。」

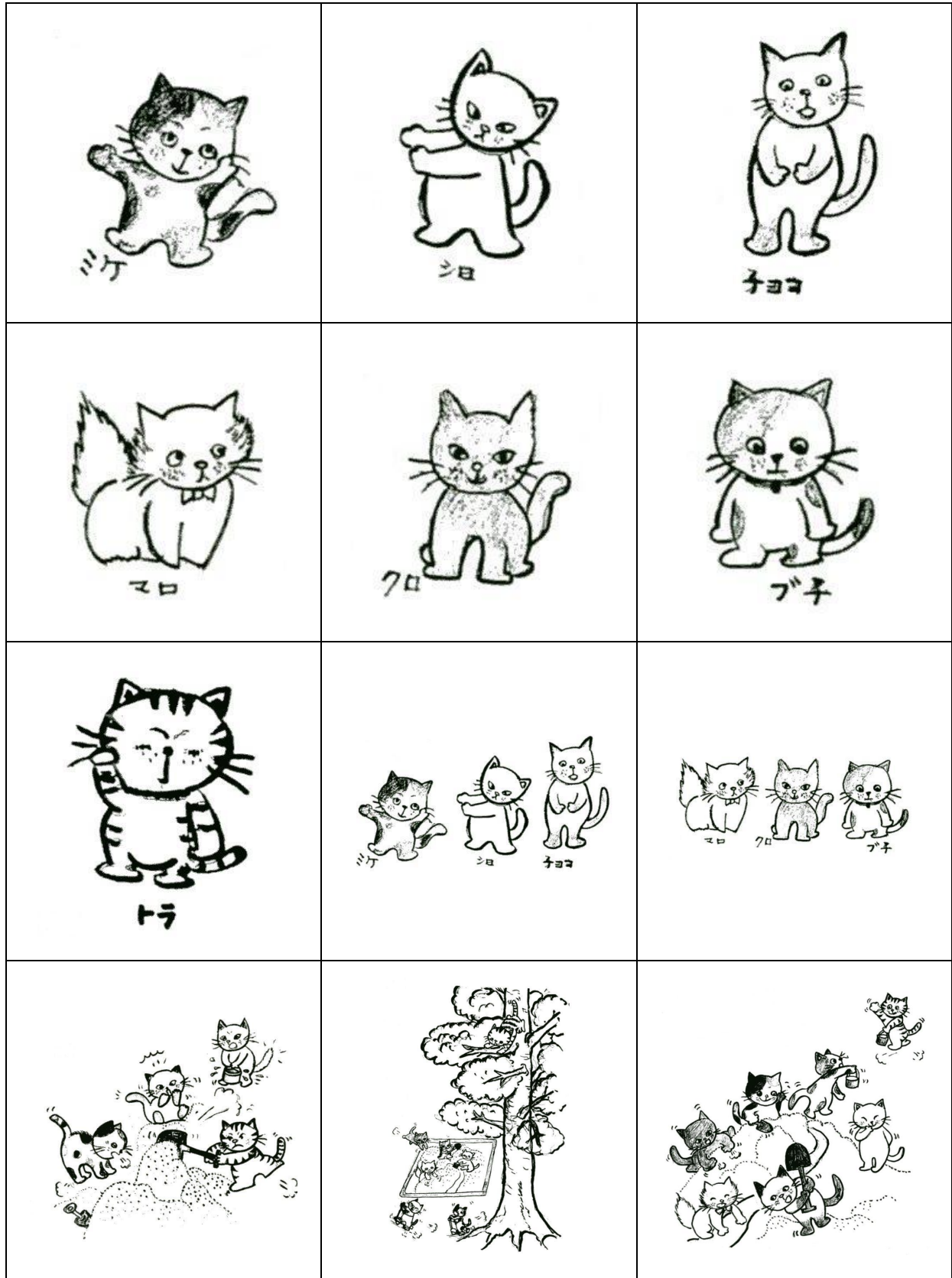
みんなは、顔を見合わせて笑いました。



ニヤンニヤン幼稚園には、きょうもトラくんとみんなの楽しそうを声がひびいています。



<ペープサート>



(必要な数だけコピーして使用してください。)